

国  
(問題)  
語

2019年度

〈H31132012〉

## 注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～13ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

## 5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

このころの左大臣と聞こゆるは、関白殿の御弟にこそおはすれ。御身の才なども賢く、何ごとも兄の殿にはたちまざり給へれば、帝もいみじく重きものに思ひ聞こえ給へり。北の方は先帝の四の宮になんおはすれば、いとやんごとなき御身なれど、いといったうもの怨じをし給ふ。御心さがなくぞおはしける。

宰相の君とて、兵衛督にて失せにしが娘、心ざまなどゆゑありて、見る目もなべてにはあらざりけるを、御覧じはなたずやありけん、ただならずなりにけるを、この女宮、いとど心づきなきことに思ひて、さまさまはしたなめ、堪へ忍ぶべくもあらぬに思ひわづらひて、むつまじく行き交ふ所などもなく、親たちもうちつづき失せにしかば、むげによるべなき人にて、西の京といふ所に、乳母なる者の家に行き隠れにけれど、殿の御心ざし深きことなれば、あはれにのみ思されて、心苦しきことさへ御覧じ知りければ、そこにも訪れ、忍びて渡りなどし給ひけるを、やすからぬことに宣ひて、かの西の京をも、おどろおどろしくいましめられければ、すべき方なく悲しきままに、明け暮れは音をのみ泣きて過ぐるほどに、姉なる人、常陸の守が妻にてなんありけるが、折しも上りてある、いとうれしくて、世の憂き時の隠れ家にもやと、尋ね寄りたれば、彼も都の内にはまた知る人もなく、昔ながらの住みかも跡絶えにしたつきなさに、この宰相の君ばかりを頼みて、道の果てなるかことを語り合はせんと思ひ立ちけるに、「かく殿の内をさへあくがれて、立ちある雲の跡なきもの思ひに沈まむことも、あぢきなきわざなめれば、何か、なかなか同じ雲居ならでも、心み給へかし」とて、かの常陸へいざなひければ、「げに、かくのみはしたなめられ奉りて、憂き目も見るべかめる世の憂きよりは、わが身一つをなきになしても、都に跡絶えなむも心やすかりぬべく」思ひ乱るるには、「まづたひらかにも出でものし給はば、遥かなる世界にて、いかになり給はむずらむ。などしもかかる憂き身に宿るべく、結び置きけん」など思ひ乱るれど、止まりても、はかばかしかるべきならねば、下りにけり。

〔『石清水物語』による〕

問一 傍線部 1「聞こえ」は、誰への敬意をあらわす語か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 帝
- ロ 先帝
- ハ 兄の殿
- ニ 左大臣
- ホ 関白殿

問二 傍線部 a、eの主語はそれぞれ誰か。最も適切な組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- |   |   |      |   |     |   |     |   |     |   |      |
|---|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|
| イ | a | 兵衛督  | b | 殿   | c | 帝   | d | 北の方 | e | 姉なる人 |
| ロ | a | 宰相の君 | b | 関白殿 | c | 左大臣 | d | 乳母  | e | 姉なる人 |
| ハ | a | 兵衛督  | b | 帝   | c | 殿   | d | 北の方 | e | 宰相の君 |
| ニ | a | 宰相の君 | b | 兵衛督 | c | 左大臣 | d | 帝   | e | 宰相の君 |
| ホ | a | 兵衛督  | b | 左大臣 | c | 左大臣 | d | 北の方 | e | 宰相の君 |

問三 次の和歌にある助動詞「べし」は、傍線部 X・Y・Z の助動詞「べし」のうちどれと同じ意味用法か。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

心にもあらでこの世に長らへばこひしかるべき夜半の月かな

イ X

ロ Y

ハ Z

ニ XとZ

ホ YとZ

問四

傍線部①②③はそれぞれ誰をさすか。最も適切な組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ① 北の方 ② 常陸の守 ③ 左大臣

ロ ① 娘 ② 乳母 ③ 常陸の守

ハ ① 北の方 ② 常陸の守が妻 ③ 帝

ニ ① 四の宮 ② 宰相の君 ③ 関白殿の弟

ホ ① 北の方 ② 姉なる人 ③ 左大臣

問五

傍線部2「心苦しきこと」とは、本文中のどの部分をさすか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ なべてにてはあらざりける

ロ ただならずなりにける

ハ さまざまはしたなめ

ニ むげによるべなき人にて

ホ 行き隠れにけれ

問六

傍線部3「まづたひらかにも出でものし給はば、遥かなる世界にて、いかになり給はむずらむ」の解釈として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ まず無事にお子がお生まれになったら、遠く離れた田舎の地では、どんなふうにお育ちになるのだろう。

ロ まず姫君が無事に都を出発なさったら、遥かな田舎では、最後はどんな境遇になってしまわれるだろう。

ハ まずは平穩に旅をお続けになったとしても、都から離れた田舎では、どんなにお困りになることだろう。

ニ 最初は乳母の私が付いて無事に出産なさったとしても、遠い地方では、どのように子育てをなさるのだろう。

ホ 最初に歩まれる道が平坦であったとしても、その後の長い道中では、どのような困難を体験なさるのだろう。

問七

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 宰相の君は美しく人柄の良い女性であり、帝に愛されて懐妊した。

ロ 左大臣は親を失った娘が不憫で放っておけず、面倒を見ることにした。

ハ 常陸に住む姉は地方で暮らしているのが寂しく、妹に会いたく思った。

ニ 左大臣の北の方は嫉妬深い人柄で、左大臣が寵愛する女性たちを放逐した。

ホ 姉妹は両親を失って、邸にも住めなくなったので、常陸に下向することにした。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

予少時客遊金陵、浮屠慧礼者從予遊。予既吏淮南、而  
慧礼得龍興仏舎、与<sup>ニ</sup>其徒日講<sup>ニ</sup>其師之說<sup>ヲ</sup>。嘗出<sup>デ</sup>而過焉<sup>ニ</sup>。  
庫屋數十椽、上破而旁穿<sup>ツ</sup>。側出<sup>デ</sup>而視<sup>レ</sup>後、則榛棘出人<sup>ヲ</sup>、不  
見<sup>ニ</sup>垣端<sup>ヲ</sup>。指<sup>シテ</sup>以語<sup>リテ</sup>予曰、「吾將除此而宮之。雖<sup>モ</sup>然<sup>リト</sup>、其成也<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>三  
以<sup>テ</sup>私<sup>ニ</sup>吾後<sup>ニ</sup>。必求<sup>メテ</sup>時之能<sup>ク</sup>行<sup>フ</sup>吾道<sup>ヲ</sup>者<sup>ヲ</sup>付<sup>セン</sup>之<sup>ニ</sup>。願<sup>ニ</sup>記<sup>シテ</sup>以<sup>テ</sup>示<sup>シ</sup>後<sup>ニ</sup>之  
人<sup>ニ</sup>、使<sup>メ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ラ</sup>私<sup>スル</sup>焉<sup>ヲ</sup>」。当<sup>タリテ</sup>是時<sup>ニ</sup>、礼方<sup>ニ</sup>丐食<sup>ニ</sup>、飲<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>卒<sup>レ</sup>日<sup>ヲ</sup>。視<sup>ルニ</sup>其居<sup>ニ</sup>  
枵然<sup>タリ</sup>。余特戲<sup>レテ</sup>曰、「姑成<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>、吾記<sup>ス</sup>無<sup>シト</sup>難<sup>キ</sup>者<sup>ヲ</sup>」。後四年、来<sup>リテ</sup>曰、「昔  
之<sup>レ</sup>所欲<sup>スル</sup>為<sup>ラン</sup>ト、凡<sup>ソ</sup>百二十楹<sup>ニ</sup>、頼<sup>ヨリテ</sup>州人蔣氏之力<sup>ニ</sup>、既<sup>ニ</sup>皆成<sup>レリ</sup>。盍<sup>4</sup>有  
述<sup>ヲ</sup>焉<sup>ヲ</sup>」。噫<sup>ああ</sup>、何其能<sup>ク</sup>也<sup>ヲ</sup>。蓋<sup>ス</sup>慧礼者<sup>ナル</sup>、予知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>、其行<sup>ヒ</sup>謹潔、学博<sup>クシテ</sup>而  
才敏<sup>ナリ</sup>。而<sup>シテ</sup>又卒<sup>フルニ</sup>之<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>私<sup>スル</sup>。宜<sup>ハ</sup>成<sup>ス</sup>此<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>難<sup>カラ</sup>也<sup>ヲ</sup>。

（王安石『臨川先生文集』による）

（注）金陵……今の江蘇省南京。

浮屠……仏僧のこと。

慧礼……仏僧の名。

淮南……今の江蘇省揚州。

庫屋……屋根の低い粗末な建物。

數十椽……数十本のたるき。

榛棘……雑木やいばら。

枵然……がらんとして何も無いさま。

百二十楹……百二十軒。

問八 傍線部1は、「私は今すぐこれらの物を取り除いて、ここに立派な寺院を築こうと思う」という意味である。この意味に沿うように、記述解答用紙の問八の白文に返り点のみを記入せよ。振り仮名・送り仮名は付けないこと。

吾將除此而宮之

問九 傍線部2「願記以示後之人、使不得私焉」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 記に詳細を書いてもらうことで、私の死後も、背後で画策する者たちの好き勝手にさせないようはつきり示してくだされ。

ロ どうか記を書き残して私の思いをはつきり示し、後世の人々がこの寺を好き勝手に私有化できないようにさせてくだされ。

ハ あなたの手でこの事業の全てを記録して後世の人々に誇示し、寺の復興に私欲が少しもなかったことを知らしめてくだされ。

ニ 名文家であるあなたに記を書いてもらい、私のこの偉業を後世に伝え、寺の歴史を好き勝手に書き換えぬようにさせてくだされ。

ホ 事実重視の記録で事業の困難さを正確に伝えてもらい、後世この寺を訪れた人々が勝手に遊興の場に変えぬようにさせてくだされ。

問十 傍線部3「姑成之、吾記無難者」という発言の裏に隠された心情の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 寺の復興を目指す慧礼のこれからの困難と比べれば、記を書くことなど造作もないことだと感じ、場を和ませるつもりで軽口をたたいた。

ロ あきらめなさいと他人が忠告するのではなく、実現不能な難業だと自ら気づかせるため、納得するまで頑張るよう親切ごかしの言葉をかけた。

ハ 記を書くつもりはまったくなかったが、慧礼のあまりに真っ直ぐな思いに圧倒されたため、気まずいその場を取り繕おうとしてこう発言した。

ニ 慧礼の優秀さを十分に知っているため、この人ならば必ずや有言実行すると思ったが、勢い込んでいる彼の頭を少し冷やす目的であえてからかった。

ホ 寺の現状からすると、慧礼の目標はあまりに高すぎると感じたので、正直な気持ちではとうてい無理と思いがらもそれを押し隠してこう発言した。

問十一 傍線部4「蓋有述焉」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 思うに誰かが必ず記を書くべきである。

ロ おそらく記を書くことになるであろう。

ハ どうして記を書かないことなどありませんか。

ニ はたして記を書くことなどありえたでしょうか。

ホ いったいどのように記を書いたらよいでしょうか。

問十二 傍線部5「宜成此不難也」は、四年という短期間で偉業を完成させた慧礼に対するある種の賛辞である。筆者が「宜なり」と考えた理由の説明として、本文の内容とは合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 慧礼はかつて自分につき従って遊学したことがあり、彼が博学ですぐれた才覚をもつ人物であることを深く理解していたから。

ロ 慧礼は日々托鉢の行に明け暮れるなど純粋な思いで仏道修行に励んで功德を積み、宗教者として清廉潔白な人であったから。

ハ 慧礼の日々の行いや振る舞いが周囲の人々の信頼を呼び寄せ、その結果多くの支援が集まるのは至極自然な成り行きだったから。

ニ 慧礼はただ宗教者としてすぐれていただけでなく、世俗の有力者と親密に社交するなど世故に長け理財の術をも心得ていたから。

ホ 慧礼は荒廃した寺院を見事に復興させたにもかかわらず、決しておごり高ぶらず、冷静沈着に己の死後のことまでも慮っていたから。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

わたしたちが、テープレコーダーのような音声記録装置に自らの声(姿)をはじめて記録し再生したときに、それを自身の声(姿)として容易に受け入れることができないことは、よく知られている。このことは、写真装置が出現した当初、人々が自らの肖像写真にとまどいを持ったことと同様である。

わたしたちの声は、咽頭から耳骨の回路をとって自身の耳に伝わる。その声を、自身の声として認識してきたわたしたちにとって、耳骨の回路を介さないテープレコーダーの声は、音色が異なっている。

鏡像、あるいは自己の頭蓋に共鳴する声は、わたしたちにイマジネール<sup>(注)</sup>な自己像を与えてきた。そして日常的には、このイマジネールな自己によってわたしたちは外界を対象化してきたのである。しかし、声のレコーダー(記録装置)そして写真装置は、イマジネールな自己像を抹殺してしまう。写真装置というメディアが「嘘をついているからでなく、その痕跡保存(証拠保全)の機能が鏡像段階を骨抜きにしているからである」。「別の言葉でいえば、骨抜きにされたのは魂(心)それじたい」(キッター) <sup>(注)</sup>なのだ。

絵画も文学もイマジネールな肖像を描く。写真装置は、身体を欠落させた心や魂を映し出しはしない。しかし、写真装置は、それを見ることなく眼を閉じた自己の姿をも与えてくれるのである。文字テキストに世界を還元する近代的主体は、写真装置によって解体を準備されていたといえるかもしれない。 <sup>a</sup>、写真装置によって対象世界を捉えようとする撮影者のまなざし(主体)は、特権的な場を与えられつづけてきた。兵器システムによって対象を撃つように、写真装置を対象にむけている主体として特権化されている。

ところで、対象物を記憶するということでは、写真装置(フोटोगラフィック・カメラ)からデジタル写真装置(デジタル写真装置)へと引き継がれているように思える。しかし、さほど単純なことではない。 <sup>2</sup>

両者のちがいのひとつは、ひとことでいえば、写真装置(フोटोगラフィック・カメラ)が光学的な記録(記憶)装置であり、その画像は、印画紙に光りをあてることで得られるということである。

他方、デジタル写真装置は、印画紙という物質を必要としない。これはデータによる記憶装置そのものである。それは写真装置(フोटोगラフィック・カメラ)に内在していた記憶装置という特性をより特化したものとなっている。繰り返すが、デジタル写真装置の記憶は、写真装置(フोटोगラフィック・カメラ)とは異なって、物質ではなくデジタルなデータである。通常、デジタル写真装置によって得られた画像はコンピュータを介してプリントされ、紙として物質化される。

デジタル写真装置は、いわば 1 であり、そうした意味では、すでに見てきた写真装置と同様に、イマジネールな自己像を消し去るものである。さらには、現像処理などの時間も必要とせず、瞬時に画像が出現するとともに、物質性すら持たないがゆえに、いちだんと主体や自我のゆらぎを促進するものとなる。

シユート(撮影)する主体はどうだろうか。デジタル写真装置の記憶は、信号化され、多くの場合、コンピュータ自体に、あるいはコンピュータを介してCDなどさまざまなメディアに保存される。通常、それらの画像は、モニタの上で見られるだけで、多くの画像はプリントアウトされずにデータ保存されるのみである。コンピュータが日常化するにつれ、わたしたちはさまざまな記憶をコンピュータにあずけるようになった。その結果、コンピュータはわたしたちの外化した脳だというメタファーがたびたび語られた。 b、デジタル写真装置で撮影された膨大な画像(イメージ)は、外化された脳であるコンピュータに記憶され、時折、その記憶をまさぐるように、 <sup>A</sup> 検索・確認されることになる。

このことによって、撮影者もまた自ら撮影した画像の記憶を自身の中にとどめることをホウキし、そのことをコンピュータにあずけてしまう。記憶を「他の客体に転写」してしまうのである。その結果、シユートしたという身体的記憶すらも曖昧なものになってしまっているのではないか。

写真装置(フोटोगラフィック・カメラ)によって得られた画像＝写真(photograph)には、かすかにであれ、「書く＝graph」 <sup>1</sup> との意識が残されていた。フラインダーをのぞく行為もそのひとつである。

photoとは「光」のことであり、光によるグラフ(書)がフोटोगラフということになる。暗室で印画紙を現像液に浸すと、銀の粒子がしだいに酸化し黒い画像が現れる。銀の粒子の痕跡には、遠い記憶としての「書く」ことを想起させるものがある。



graph (グラフ、書く)と似た言葉に、glyph (グリフ・絵文字)がある。古代における glyph の語は、石に刻みつけるという強度の身体的な行為の記憶とともにある。イタリア語経由の英語、フランス語のグラフィティ (graffiti) には、落書きの意味もあるが、「線刻画」という意味もあり、やはり刻み込むという行為に結びついている。grafio (グラフィオ) は、「ひっかくこと」。いずれも、かつては書くことがかなり強度のある行為にかかわっていたということだ。

しかし、信号化されたデジタル画像に「書く」という身体性はいささかも残されていない。言葉としても「デジタル・フォトグラフ」といういい方はあまり一般的ではなく、「デジタル・フォト」といつている。

デジタル写真装置のもっとも日常的なものは、すでにふれたように、携帯(電話)やスマートフォン(スマホ)に装備されたものである。<sup>3</sup> 携帯に装備されたデジタル写真装置での撮影は、これまでの写真装置による撮影とはまったく異なる身体的経験となっている。このことは、「ファインダー」をのぞかずに対象を撮影することとかかわっている。対象物にむけて片手でスマホをかざして撮影している人々の光景がそのことを示している。

**B**  
**c**、携帯にかざらず、デジタル写真装置で対象を撮影する場合、ファインダーをとおして対象物を見ることはカイクではないが、通常ほとんどない。一眼レフタイプのものには、ファインダーが用意されている(それはかつての写真装置のまなざしを残そうとしている)が、多くのものにはファインダーそのものが存在しない。この場合液晶モニタをとおして対象を見ることになる。ファインダーで対象を捉える場合、それは撮影者の眼(眼球)と接しているために、撮影者の視線(まなざし)となる。したがって、撮影はまさにシュートするという表現が使われることになる。しかし、デジタル写真装置(デジカメ)のモニタを見ながらの撮影は、デジカメと眼(眼球)との間に距離がある。つまり、撮影者の眼は、デジカメのまなざしをコントロールしているといったほうがいいだろう。こうした行為は、すでにシュート(狙い撃つ＝撮影する)ということからいささか乖離している。**d**、「コピー」する行為にちいかもしれない。

実際、デジカメはコピー機のように使われることが少なくない。書店で雑誌情報を携帯電話のデジカメでコピーする人が出てきたために、書店はこれを「デジタル万引」と呼び、禁止するようになった。このことからわかるように、デジカメはコピー、あるいはスキニングといった行為と見分けがなくなっているのだ。資料をメモすることなく、デジカメでコピーすることが、すでに不自然な行為ではなくなっている。

その結果、かつての写真装置(フォトグラフィック・カメラ)によるシュートという撮影者の主体の特権性は希薄化していくことになる。古くから残されてきたグラフという身体的行為は、コピーという身体性を失ったものになる。また、デジカメによる画像はコピーとして無限に転送することが可能になる。

ファインダーで対象を見ることが、モニタで対象を見ることが、また決定的なちがいがあ。ファインダーの場合、撮影者は対象をガラスあるいはレンズをとおして直接見る。しかしモニタを見るということは、**2**として見るのである。デジカメのモニタはいわば外在化された、あるいは客体化された網膜であり、その網膜に結ばれた画像を撮影者は追認しているのである。また、わたしたちは、対象を物体として見ているのではなく、モニタの「光の束」として確認しているだけなのである。

一眼レフのデジタル写真装置を使う、いわゆる職業的なカメラマンでも、その装置をパソコンに接続し、カメラではなく、大きなパソコンのモニタで画像を確認し、パソコンのキーボードでシャッターを切るという作業をしている場合も少なくない。こうした作業は、被写体(対象物)に背をむけてパソコンのモニタを見ているといったことも日常的になっている。

**4** したがって、わたしたちの画像の記憶は、わたしたちから離れ、「光の束」の信号として保存されているにすぎない。してみれば、デジタル写真装置は、一方でかつての写真装置と同様、わたしたちのイメージ的な自己像(近代的主体や自我とかかわる)を崩壊させるとともに、他方その撮影主体のまなざしをも消失させ、さらには対象世界を物質ではなく「光の束」へと還元してしまったといえるだろう。

(柏木博『視覚の生命力』による)

(注1) イマジネール……imaginaire (フランス語)。想像の、架空の、の意。

(注2) フリードリヒ・キッター (一九四三―二〇二一)……ドイツの評論家。

問十三 傍線部 A・B にあてはまる漢字二字を、それぞれ記述解答用紙の問十三の欄に楷書で記入せよ。

問十四 空欄

a

d

に入る語をそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。ただし、同一の語が重複することはなく、選択肢には本文に入らない語も含まれている。

イ たしかに      ロ ところが      ハ とはいえ      ニ むしろ      ホ もちろん

問十五 傍線部 1 「写真装置は、それを見ることなく眼を閉じた自己の姿をも与えてくれる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 目をつぶれば鏡に映る自らの姿を見ることは不可能となるが、記憶装置はそれを可能にし、それまでの自己認識にゆらぎを与えるということ。

ロ 写真装置はテープレコーダーと同様に自己認識を破壊するが、同時に普段は気付きにくい本当の自分の姿を、自己の心の中に想像させるということ。

ハ 記憶装置としての写真装置は身体を欠落させた心を見ることなく、解体された自己像を基準に対象を捉えることで、自己の理想像を示すということ。

ニ 写真装置の登場は自己自身を身体と心に分けて認識していた近代的主体に対して、心身を一元的に把握する、新しい自己認識を切りひらいたということ。

ホ 鏡像によって成立するイメージネールな自己像は、近代的主体として文字テキストに世界を還元するが、身体としての自己を自己自身の眼では見られないということ。

問十六 傍線部 2 「さほど単純なことではない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 印画紙という物質によらずに、光学的な記録装置として記憶を純化するデジタル写真は、イメージネールな自己像を擁護しないから。

ロ 両者は同じ写真装置であっても、デジタルの場合は物質性を持たないため、イメージネールな自己像の解体をより一層加速させてしまうから。

ハ 印画紙を不要とする構造のため、同じ写真装置でも対象のゆらぎをもたらすデジタル写真は、コンピュータに身体を委ねるのに等しいから。

ニ 両者の機能は連続しているように見えるが、物質性を必要としないデジタルの場合、必要以上に記憶装置としての性質を際立たせてしまうから。

ホ デジタル写真のデータは信号化されてコンピュータに保存されるため、主体の身体を媒介することなく、純粋な記憶として保存されてしまうから。

問十七 空欄

1

に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 究極の写真装置

ロ 信号化された記憶

ハ 主体の転写装置

ニ 物質化された記憶

ホ 純粋な記憶装置



問十八 傍線部3「携帯に装備されたデジタル写真装置での撮影は、これまでの写真装置による撮影とはまったく異なる身体的経験となっている」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ デジタル写真の撮影は身体性を欠落させて撮影するため、自己の判断や思考が希薄なまま対象を選択し記憶する行為になるから。

ロ 片手でスマホをかざすという行為が、従来の写真撮影の持つ強度の身体性とは別次元で対象に接近し画像を切り取る行為だから。

ハ 撮影者は液晶モニタをとおして対象を見るため、ファインダーをのぞきながら撮影するときの身体性から主体が乖離してしまうから。

ニ ファインダーをのぞかずに液晶画面をとおして対象を捉えることは、撮影主体のまなざしを欠落させたまま複製を生み出すような行為だから。

ホ 対象をファインダーからのぞくのとモニタで確認するのでは眼球と対象との距離が異なり、撮影することの意味が変わってくるから。

問十九 空欄 2 に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 対象をあらかじめデジタル画像に変換されたもの

ロ 対象を投影した画像から主体を消去したもの

ハ 対象を客体化しデジタル画像と交換されたもの

ニ 対象を撮影者の網膜を通さずに転写したもの

ホ 対象をデジタル画像に置き換えて追認したもの

問二十 傍線部4「わたしたちの画像の記憶は、わたしたちから離れ、「光の束」の信号として保存されているにすぎない」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 被写体に背を向けてモニタを確認することは対象を直接肉眼で捉えることにはならず、撮影者の記憶から経験としての撮影の意味が欠落し、デジタル画像として保存されるコンピュータに人間が従属してしまうということ。

ロ デジタル写真装置による撮影は、撮影者の身体性のみならず対象の物質性をも喪失させる行為であり、モニタ上の画像は単なる光学的な現象となって、対象への認識や過去の記憶をわたしたちから奪ってしまうということ。

ハ イマジネールな自己像に支えられた人間の記憶が自我を構成しながら世界を成り立たせていたが、デジタル写真による撮影は被写体を光学的な情報に還元するだけで、ともすれば撮影者の個性や自分らしさも奪いかねないということ。

ニ 客体化された網膜であるモニタを見ることは、ファインダー越しに対象と対話しながらシャッターを切る一回的な経験とは異なり、対象を見るともなく画像の信号を蓄えていくだけで、撮影者に虚無感を与えることになるということ。

ホ 外化した脳であるコンピュータに記憶をあずけることは人間の本能に反する行為であり、デジタル信号に変換された情報だけが蓄積されてしまうと、結果として大切な思い出や記憶が単なる出来事の記憶のように書き換えられてしまうということ。

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

外国人や子供に教えるということは、いいかえれば、共通の規則（コード）をもたない者に教えるということである。逆に、共通の規則をもたない他者とのコミュニケーション（交換）は、必ず「教える—学ぶ」あるいは「売る—買う」関係になるだろう。通例のコミュニケーション論では、共通の規則が前提されている。だが、外国人や子供、あるいは精神病患者との対話においては、そのような規則はさしあたって成立していないか、または成立することが困難である。これは、特異なケースだろうか。

われわれが誰でも子供として生まれ、親から言語を習得してきたということは、けっして特異なケースではなく、一般的な条件である。また、われわれが他者との対話において、いつもどこかで通じ合わない領域をもつことは、一般的にいえることだ。その場合、よりよく相互を理解しようとするならば、相手に問いたださねばならず、あるいは相手に教えなければならぬ。いいかえると、それは「教える—学ぶ」関係に立つということである。共通の規則があるとしたら、それは「教える—学ぶ」関係のあとにしかない。

「教える—学ぶ」という非対称的な関係が、コミュニケーションの基礎的事態である。これはけっしてアブノーマルではない。ノーマル（規範的）なケース、すなわち同一の規則をもつような対話の方が、例外的なのである。だが、それが例外的にみえないのは、そのような対話が、自分と同一の他者との対話、すなわち自己対話（モノローグ）を規範として考えられているからである。

しかし、私は、自己対話、あるいは自分と同じ規則を共有する者との対話を、対話とはよばないことにする。対話は、言語ゲームを共有しない者との間にのみある。そして、他者とは、自分と言語ゲームを共有しない者のことでなければならぬ。そのような他者との関係は非対称的である。「教える」立場に立つということは、いいかえれば、他者を、あるいは他者の他者性を前提することである。

哲学は「内省」からはじまる。ということは、自己対話からはじまるということである。それは、他者が自分と同質であることを前提することだ。このことは、プラトンの弁証法において典型的にみられる。そこでは、ソクラテスは、相手と「共同で真理を探索する」ようによびかける。プラトンの弁証法は対話の体裁をとっているけれども、対話ではない。そこには他者がいない。

他者の他者性を捨象したところでは、他者との対話は自己対話となり、自己対話（内省）が他者との対話と同一視される。哲学が「内省」からはじまるということは、それが同一の言語ゲームの内部ではじまるというのと同義である。私が<sup>2</sup>独我論とよぶのは、けっして私独りしかないという考えではない。私にいいえることは万人にいいえると考えような考え方こそが、独我論なのである。独我論を批判するためには、他者を、あるいは、異質な言語ゲームに属する他者とのコミュニケーションを導入するほかない。

\*

「教える」立場ということによってわれわれが示唆する態度変更は、簡単にいえば、共通の言語ゲーム（共同体）のなかから出発するのではなく、それを前提しえないような、場所に立つことである。そこでは、われわれは他者に出会う。他者は、私と同質ではなく、したがってまた私と敵対するもう一つの自己意識などではない。むしろこの場所は、われわれの方法的懐疑によってのみ見出されるものである。

たとえば、マルクスは、商品交換は「共同体と共同体の間ではじまる」といつている。共同体の内部においても、交換はあり、レヴィ・ストロース<sup>3</sup>が明らかにしたように交換体系がある。しかし、大切なのは、共同体と共同体の間での交換なのだ。この「間」は、どこでという空間的な問題ではないし、いつという歴史的な問題ではない。マルクスがいうように、これは「抽象力」によってのみ接近しうる問題である。いいかえれば、それは、共同体（言語ゲーム）と共同体の「間」において、いかにして交換（コミュニケーション）がなされるかという問いなのである。

それは、なんら通約可能<sup>4</sup>なものをもたない二つの異なる物がいかにして等置されるのかという問いと同じことのようにみえる。しかし、たとえば共同体の内部では、たとえば家族の内部でそうであるように、交換はそのような難問に出合わない。しかも、先の問いは次のように変形されなければならない。同一の物が、異なる共同体によってなぜ違った価値をもつのか、と。交換が難問となるのは、——コミュニケーションが難問となるのは——共同体と共同体の「間」においてのみである。

マルクスは、この交換関係を価値形態として論じている。すなわち、相対的価値形態と等置形態という関係の非対称性として。卑俗にいいかえれば、それは売る立場と買う立場の非対称性にほかならない。この非対称性は、けつして揚棄されない。それは結局、貨幣（所有者）と商品（所有者）の関係、あるいは資本と賃労働の関係の非対称性に変形されるだけである。

マルクスの功績は、自らいうように、交換の根底に、そのような非対称性を見出したことにある。それが価値形態とよばれているのである。古典経済学ではこのような問いは生じない。それは、共同体と共同体の「間」に形成された市場が、それ自体もう一つの共同体（システム）として確立されるような所からはじめているからだ。そこでは、交換はたんに規則によってなされるということができし、それぞれの商品に内在的な価値があるかのようにいうことができる。

しかし、マルクスは、そこから、交換がぎりぎりの問題となるような場所に遡行している。それはくりかえしていうように、時間的・空間的な場所ではない。それは、つねに現存するが、共同体（システム）のもとでは隠蔽されてしまうような場所である。

私の考えでは、マルクスは、共同体と共同体の「間」において存在する関係を、社会的とよんだのである。たとえば、次のようないい方をみてもよい。

或る商品がきわめて複雑な労働の生産物であるとしても、その価値は、その商品を単純労働の生産物と等置するのであつて、だから、その商品の価値自身はただ一定量の単純労働を現示する。さまざまな労働種類が度量単位としての単純労働に換算される割合は、生産者たちの背後で一つの社会的過程を通じて確定されるのであり、だから、生産当事者たちに慣習によって与えられているもののように仮現する。（『資本論』）

ここでは、マルクスは古典経済学の労働価値説をとっているようにみえるけれども、重要なのはそのことではない。共同体と共同体の間における商品交換（等置）には、実のところ何の根拠もない。等置されたがゆえに、通約可能な何かがあると思われるのであつて、その逆ではない。人々は、慣習にしたがつて交換する。だが、この慣習は、「社会的な過程」の結果なのである。

われわれは、ここで共同体と社会を区別しておくことにしよう。<sup>4</sup>社会的なものとは、共同体と共同体の「間」での交換（コミュニケーション）関係にかんしてのみいいうるのである。あるいは、共通の規則を本来的に前提しえないような場所での交換関係にかんしてのみ。逆に、そこから私のいう共同体が何であるかがはつきりするだろう。それは、村や地域共同体や組織や国家だけを意味するのではない。要するに、共同体とは、共同性であつて、一つの言語ゲームが閉じる「領域」にはかならない。

マルクスが、社会的関係が貨幣形態によつて隠蔽されるというのは、社会的な、すなわち無根拠であり非対称的な交換関係が、対称的であり且つ合理的な根拠をもつかのようになされることを意味している。物象化とは、このことを意味する。それは、「人間と人間の関係が物と物の関係としてあらわれる」とか、関係が実体化されることを意味するのではない。そんなことは、マルクスでなくても誰でもいいうることにすぎない。

くりかえしていえば、マルクスは、価値形態、交換関係の非対称性が経済学において隠蔽されていることを、指摘したのである。同じことが、言語学についてもいえるだろう。それは、いわば、教える—学ぶ関係の非対称性を隠蔽している。<sup>5</sup>非対称的な関係を隠蔽するということは、関係を、あるいは他者を排除することと同じである。

（柄谷行人『探究Ⅰ』による）

（注1）クロード・レヴィ・ストロース（一九〇八—二〇〇九）……フランスの文化人類学者。

（注2）通約可能……数学でいう「約分」が可能であること。

問二十一 傍線部1「同一の規則をもつような対話の方が、例外的なのである」とある。著者の考える「例外的」でない「対話」の一般的な様態とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間のコミュニケーションとは本来、言語ゲームを共有しない者との間のみ成立するものであり、非対称的な他者の発するメッセージをその意図どおりに受け取るために、相手と「教える―学ぶ」関係に立つことで、前提となる共通の規則を見出すことが不可欠である。

ロ 人間のコミュニケーションの基礎的事態とは、「教える―学ぶ」という非対称的な関係であり、他者との対話においてわれわれはいつでもどこかで通じ合わない領域をもつがゆえに、メッセージが受け取られたか否かを相手に問いただし、規則を確認することが必要である。

ハ 人間のコミュニケーションとは本来、自己とまったく異質な他者との間でなされる非対称的な関係設定であり、自己の発するメッセージがその意図どおりに受け取られることは保証されておらず、規則が共有されとしても、それはすべて事後的な確認としてでしかない。

ニ 人間のコミュニケーションの基礎的事態とは、外国人や子供、あるいは精神病者との対話のように共通の規則が成立していない中でメッセージを発することであり、「教える」立場に立つてその非対称性を事後的に確認することで、他者の他者性を前提しなければならない。

ホ 人間のコミュニケーションとは本来、他者の他者性を前提する非対称的な関係であり、自己の発するメッセージが届くか否かは相手しだいであるがゆえに、他者を自分と同じ規則を共有する者にする必要があるが、その関係設定は他者性を解消することと不可分である。

問二十二 傍線部2「独我論」とある。ここで著者はこの概念を批判的に用いているが、それはどのような意味においてか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 一般的に内省からはじまる哲学は、弁証法的な対話の体裁をとり、そこではソクラテスのように相手と「共同で真理を探究する」よう呼びかけが行われるが、そこで出会う他者は私と敵対するもう一つの自己意識であり、したがって弁証法を破壊するという意味において。

ロ 一般的に内省からはじまる哲学は、プラトンの弁証法におけるように対話者と「共同で真理を探究する」ことによって成り立つが、その対話は実のところ他者の他者性を捨象した自己対話であり、そこでは万人に普遍的に妥当する知は獲得できないという意味において。

ハ 一般的に内省からはじまる哲学は、弁証法的な対話の体裁をとってはいるが、私にいえることは万人にいえると考えるかぎりにおいてそれは自己対話であり、そこには他者がおらず、したがって普遍的に包摂すべき他者が尊重されないという意味において。

ニ 一般的に内省からはじまる哲学は、プラトンの弁証法にみられるように対話形式をとるが、その対話において獲得される知は、自己に妥当することは万人に妥当すると見えず知であり、それは異質な言語ゲームに属する他者を排除するという意味において。

ホ 一般的に内省からはじまる哲学は、プラトンの弁証法のように対話を通じて「共同で真理を探究する」ことを目指すが、そこでの対話は対話の体裁をとってはいるがそこには他者は不在であり、方法的懷疑によって見出される私だけがいるという意味において。

問二十三 傍線部3「これは「抽象力」によってのみ接近しうる問題である」とある。ここでいう「問題」とは何か。

その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間の社会ではあらゆる場面で交換が行われる。その際、共同体と共同体の間での交換が最も難問となるが、この「問」が空間的なものでも歴史的なものでもなく、マルクスが価値形態として論じている等価交換における非対称性であるのはなぜかという問題。

ロ マルクスは、商品交換は「共同体と共同体の間ではじまる」と言っている。その際、同一の物が異なる共同体によってなぜ違った価値をもつのかという難問が生じるのに対し、共同体の内部では非対称的な交換が容易に可能であるのはなぜかという問題。

ハ 人間の社会ではあらゆる場面で交換が行われる。その際、共同体と共同体の間での交換が最も難問となるが、ならん通約可能なものをもたない二つの異なる物が、共同体の内部や家族の内部では通約不可能なままで等置され交換されるのはなぜかという問題。

ニ マルクスは、商品交換は「共同体と共同体の間ではじまる」と言っている。その際、共同体の内部での交換を可能にするのが価値の異なる二つの物の通約不可能性であるのに対し、共同体間でのそれを可能にするのが売る立場と買う立場の非対称性であるのはなぜかという問題。

ホ 人間の社会ではあらゆる場面で交換が行われる。その際、同一物であっても二つの違う共同体においてその価値は異なるが、価値の異なる二つの物がその通約不可能性にもかかわらず、実際には等置され、交換が可能であるのはなぜかという問題。

問二十四 傍線部4「社会的なもの」とある。この概念によって著者が指しているのはどのような性質の場面か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 古典経済学の労働価値説をとっているようにみえるマルクスは、実のところ共同体と共同体の間における商品交換には何の根拠もないことに注目しているが、その場合、人々はただ慣習にしたがって交換しているだけであり、共同性という一つの言語ゲームが閉じる領域の機能こそが重要であるという場面。

ロ 「さまざまな労働種類」が「度量単位としての単純労働に換算される割合」は「生産者たちの背後で一つの社会的過程を通じて確定される」とマルクスは言ったが、その場合の社会的過程とは、共通の規則が前提できない諸共同体間での交換関係のことであり、その関係は単一の言語ゲームの外にあるという場面。

ハ マルクスは共同体と共同体の「間」において存在する関係を社会的と呼んだが、それは二つの共同体間での交換が人々の慣習によって可能となり、本来は無根拠で非対称的な交換関係が合理的なものとして制度化されていた結果であり、その過程において共通の規則が前提しえないような場所が現れるという場面。

ニ 商品は「きわめて複雑な労働の生産物」であるにもかかわらず、その価値は「その商品を単純労働の生産物と等置する」という原則にもとづいて、商品はそのつど何の根拠もない交換の回路に投げ込まれることになるが、そこでは複数の価値の間で通約可能な何かがあると思われるため、交換が可能になるという場面。

ホ マルクスは共同体という概念を、村や地域共同体や組織や国家だけを指すのではなく、一つの言語ゲームが閉じる領域という意味で用いたが、そこにおいてはあらゆる種類の商品がたがい等置され交換可能となることに、より、たんなる慣習によるのではない、「社会的な過程」としての「問」が現れるという場面。

問二十五 傍線部5「非対称的な関係を隠蔽するということは、関係を、あるいは他者を排除することと同じである」とある。本文全体の著者の考えをふり返りつつ、「関係」や「他者」を「排除」しない社会構造とコミュニケーションのあり方を一二〇字以上一八〇字以内で説明せよ。(解答は記述解答用紙の問二十五の欄に楷書で記述すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。)



問八

吾将除此而宮之

問十三

A

B

問二十五

180

120

2 5

a

2 5

b

1 3

8

国語 記述解答用紙

(記入上の注意)

受験番号・氏名は下の二つの欄に記入すること。

解答は右に指定された太枠内に黒鉛筆(HB)またはシャープペンシル(HB)で書くこと。

枠外・裏面には何も書かないこと。

問二十五の解答にあたっては、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、必ず一マス用いること。

〈2019 H31132012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

〈2019 H31132012〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

国語採点欄